長野賞論文

創造的退行のありようについて
―自我境界、現実感覚、優位感覚との関連性から―

清原　舞子*

Aspects of Creative Regression: The relationship between Ego Boundary, Sense of Reality and Superior Sensation

KIYOHARA Maiko

The purpose of the present study is to examine aspects of creative regression from the viewpoint of ego boundary, sence of reality and superior sensation, which are supposed to be signposts of pathological regression.

Based on the Graphic Rorschach test, I have newly developed a Digital Rorschach test, introducing an experimental examination for use on a tablet computer.

On research focusing on artists, as the characteristic of Rorschach, the more total reaction numbers, more Dd%, less F+%, more Σc, more ΣC・SumC, more At% have appeared.

As a result of using the Fisher and Cleveland (1958) “–body image boundaries score–”, the artists group is found to have higher barrier and penetration scores as well. The aspects of permeable and impermeable ego boundaries were suggested by Landis (1970) as the “–resilience of boundaries–”.

Furthermore, as a result of dividing artists into three groups (musicians, painters, and performers), the musician group has a mostly equal B score and P score, the painter group has a higher B score, and the performer group has a higher P score. Also, it has been suggested that P score is related to concept-dominance – blot-dominance by D.G.R.

In previous research, as the classified result of the concept-dominance of normal-adults, “the balance or imbalance between blot and concept” has mostly dominated. In this study, however, the Mx type “mixture imbalance between blot and concept,” –which is not usually seen in normal-adults, has been seen in about 65 % of the artists group. The Mx type has been associated with schizophrenia.

Finally, a qualitative view has been added based on the ideas of “–deviant verbalization–” and “–confabulation– ”.

キーワード：創造的退行、自我境界、現実感覚、優位感覚、グラフィック・ロールシャッハテスト
Keywords：Creative regression, ego boundary, sense of reality, superior sensation, Graphic Rorschach

＊東洋英和女学院大学大学院　人間科学研究科　臨床心理学領域　修士課程 2016 年 3 月修了生

１．はじめに

まず筆者が本研究に望む背景にいたった動機について述べたい。筆者は幼少期より日本の古典舞踊やモダンダンス等を習い、身体鍛錬を重ねたのち、美術大学に進学し、身体表現を専攻してきた。これまで表現活動に携わるなかで、近しい友人のうち４人を心の病で亡くした経験がある。

統合失調症や自閉症など、心の病をかかえている人のなかに、優れた芸術作品を生みだす人がおり、また、偉大な芸術家のなかに精神病であった人の多いことが知られている。ここから筆者は、芸術家と精神病者の境界はどこにあるか、そして、両者がいだく世界には何か近似するものがあるのではないかに関し常々疑問に感じてきた。

Freud, S は、心的抑圧を芸術作品として表出することを「昇華」と定義した。さらに「退行」という概念によって両者は説明されている。すなわち、精神病者の内的体験として生じる「病的退行」と、芸術家が創造活動における内的体験として生じる「創造的退行」がそれである。この「創造的退行」を自我機能の観点から捉えてみようと考えたのが本研究の出発点である。

２．創造的退行について

２．１　創造的退行の基本的概念

自我のコントロールを失った病的な退行と、自我のコントロール下にある退行を区別し、特に芸術家が創作過程において用いる自我の状態を「自我による自我のための退行」という概念によって捉えたのは Kris, E である。Kris (1952) は、「芸術家の自我機能は、無意識の心的過程において退行するだけの自律性が備わっている」と指摘した。この「自我による自我のための退行」という自我のあり方を Schafer, R は「創造的退行」と名づけ、これを自我心理学の分野において発展させた。

芸術家の精神分析的研究は Freud, S[1] に遡る。「芸術家がいだく精神世界と精神病者がいだく世界には、何か近似するものがあるのではないか」という筆者の疑問に対して、Kris の“狂気の芸術”と題する精神病者の自発的な芸術的創作に関する研究から一つの解が与えられた。Kris（1952）[2] によれば、病気の進行過程のある時点で創作活動に没頭しはじめる精神病者がいるといわれるが、統計的にいえば創作への発作が生じることは稀であって、芸術活動を活発に行うのは入院患者の２％以下にとどまるという。また、病前人格と技能や創作衝動の関連は明確ではなく、「精神病的“創作者”の“典型的な”例は訓練のない人びとである」と述べる。そして、その特性として、「作品が量的には増大するのにもかかわらず、技能の水準は本質的には変わらない」と指摘した。

正常者にもこれに対応する現象がみられるとされており、Freud, A（1936）は、「思春期の人びともまた、襲いかかってくる変動に対して、生産力を高めること―多くは芸術的生産―によって防衛する傾向がある」と述べる。

創造的な活動をする人が実際に精神病に罹患する確率が高いのかどうか、近年のアイスランドで住民８万人以上の遺伝子サンプルの調査という大規模な研究がなされた。その結果、「クリエイティブなセンスの遺伝子をもつ人では、統合失調症や双極性障害の遺伝学的なリスクスコアについても普通の人と比べると高いと分かった」（Power RA et, 2015）という興味深い研究結果が報告されている。すなわち、創造性の遺伝子と統合失調症や双極性障害の遺伝子が同じルーツをもつ可能性が示唆された。

２．２　創造的退行の治療的意義

神田橋（1997）は、「言葉はイメージを運ぶ荷車である」と述べる。これは「心理面接の根幹は non-verbal にある」ことを示しており、セラピストとクライエントの間で交わされるのは言葉を含め、そのすべてが表現のやりとりであるという。

クライエントのいだくイメージや表現行為を心理療法に取り入れたのは Jung, C.G である。Jung は統合失調症の患者を多く診てきたと言

い、自身もまたFreudと決別したのち病的な体験をしたことを自伝（Jung, 1963）で語っている。そのような体験をもとに表現行為が心理療法となりうることを見出したのは興味深い。河合（1987）は、「心理療法の根本は自己治癒であると考えている。自己治癒力がはたらくとき、そこには必ず創造性がかかわっている」として、「芸術家自身が自らの作品によって癒される」とも述べている。箱庭療法を通じてクライエントが自分の内なる自己治癒力をもって表現していくとき、「それはクライエントがすでに知っている自分の心のなかの状況を表現するというのではなく、創造活動でなければならない。創造活動を通してこそ治療が行われるのである」（Spiegelman & 河合 , 1987）。

無意識的領域に働きかける表現療法あるいは芸術療法には、絵画療法、箱庭療法、遊戯療法、ダンスセラピーなど、様々な手法が心理療法として取り入れられている。また、あらゆる芸術形態を統合的に使用する「表現アートセラピー」という手法が McNiff, S[3] によって提唱された。McNiff は「クライエントの発する表現を受けとる治療者自身も表現者でなければならない」と指摘する。

２．３　創造性と創造的退行の測定

一次過程／適応的退行（すなわち創造的退行）の研究は Holt, R によって行われた。Rapaport のもとで学んだ Holt（1956）は、ロールシャッハ法（以下、Ror 法と略す）を用いた「一次過程表象尺度（PRIPRO）」を開発した。

PRIPRO を用いた「芸術家の創造性」に関して、吉村（2004）は Dudek（1968）の研究を取り上げ、「一次過程思考の量やその統合の程度が芸術的な能力の高さを予測できる」と述べる。また、「同じ芸術家であっても、経験年数が上の者や、芸術的表現力において勝っている者に多くのプリミティブな一次過程思考を認めることができる」とも述べている。また、芸術家の表現スタイルとメンタルヘルスの関係について Ludwig, A.M.（1995）が研究を行っており、その結果「詩人や抽象画家などの漠然とした対象を取り扱うことの多い芸術家のほうが、ダンスや彫刻など、明確な形に仕上げるタイプの芸術活動を生業としている者よりも精神疾患の罹患率、とりわけ精神病の罹患率や自殺率の高い」ことを見出す。この結果を踏まえて吉村（2004）は、「漠然とした形態の芸術表現を旨とする芸術家が、より深い自我の退行に親和的である可能性は十分に考えられる」と述べている。これに対して伊藤（2015）は、PRIPRO を用いた「具象画家と抽象画家の『自我のための退行』のありようの違いについて」の研究において、具象画家よりも抽象画家の方が、「形式的で退行しやすく、特に自閉的明細化、イメージの凝縮、自己関与づけ、象徴反応のカテゴリーで『自我のための退行』をしやすい」という結果を見出した。

３．自我境界について

３．１　自我境界の基礎概念

Landis, B.（1970）は自我境界を「ひとりの人が他人とかかわり合ったり、他人と自分を区別すること」と定義する。

自我境界が不安定な状態を Weiner（1973）は“あいまいな自我境界”と言い、統合失調症の特異な心性として取り上げている。すなわち「自我境界のあいまいな人は自分の身体と他人の間に明確な境界を感じられず、そのために自分に起こったことは他人にも起こり、反対に他人に起こったことは自分にも起こるように感じたり、また身体的に傷つきやすかったりして、わずかな身体的刺激ですら浸透し、彼を打ちのめしてしまうほどに、身体的攻撃に対する防衛力がない」ということである。

３．２　自我境界の測定

自我境界の測定に関しては長く研究がなされており、自我境界の状態を表すのに、「固い」「流動的」「弾力のある」など、研究者によって様々に表現される。とくに Ror. 法を用いた研究が最も系統的に行われており、なかでも代表的な

研究とされているのはFisherとCleveland[4]の「身体像境界得点」である（伊藤, 2005）。

「身体像境界得点」は、“防壁”Barrire得点（以下Bスコアと略す）と、“境界の浸透”Penetration of Boundary得点（以下、Pスコアと略す）という２つの評定法から成る。Bスコアは、境界の防護的な特質と明瞭さが強調された反応に与えられ、自己の身体と外界を明確に区別するものとした。また、Pスコアは、境界がもろくて浸透しやすいものが知覚された場合に与えられ、自己の身体と外界との境界が崩壊あるいは弱くなっている状態を意味する。FisherとClevelandの採点基準は表1-a,bに示す。

表1-a　Body image Ego Boundaryの採点基準（Fisher & Cleveland 1958）

Boundary Score		
採点基準		反応例
Ⅰ	衣類の<ばらばらになっている>付属品	・ハイネックを着た女性 ・長いパジャマを着た女性 ・レースの襟のついたコートを着た人 ・飾りのあるキャップを被った子ども ・装飾的な赤い靴下を履いた足 ・革のズボンを履いた人 ・（Ⅳブーツ、Ⅲタイを除く）ドレスの女性、コートの人 ・装飾的な衣装を着た人 ・道化 ・ローブを着た人 ・ミトンや手袋をした人 ・コック帽を被った人
Ⅱ	特殊な皮または珍しい皮で被われている動物あるいは生物	ワニ・キツネ・オオヤマネコ・プレリードッグ・スカンク・アナグマ・ヤギ・ミンク・サイ・トラ・ビーバー・カバ・モグラ・サソリ・セイウチ・ボブキャット・ハイエナ・シロイワヤギ・アシカ・イタチ・カメレオン・ヒョウ・クジャク・アザラシ・ヤマネコ・コヨーテ・ライオン・ペンギン・羊、仔羊・クズリ・クロコダイル・トカゲ・ヤマアラシ・シャムネコ・シマウマ（35種） ・P反応の熊の皮以外の動物の皮で、表面の性質を強調したもの（羊毛、斑点、シマシマの肌） ・かにといせえび以外の殻のついた動物（カタツムリ・エビ・貝・二枚貝・カメ）
Ⅲ	大地にある囲まれた穴に関したもの	谷、くぼ地・鉱山抗・渓谷、谷間・井戸、泉・運河、入江
Ⅳ	珍しい動物の、入れ物に関するもの	太ったネコ・カンガルー・妊娠した女性・乳房
Ⅴ	覆いや保護をする表面をもったもの	傘・天幕・日よけ・ドーム・盾
Ⅵ	防衛上、外部を装甲し、それに頼っているもの	タンク・宇宙船のロケット・戦艦・装甲車・鎧を着た人
Ⅶ	覆われたり、囲われたり、隠されているもの	植木が生い茂った鉢・毛布に包まった人・煙に包まれた家・何かに隠れている人・苔に覆われた丸太・石の後から誰かが覗きこんでいる・木陰の人・岩に挟まれた人
Ⅷ	珍しい入れ物のような形をしたものや、そうした性質のもの	バグパイプ・大観覧車・王座・高い椅子
Ⅸ	いくつかの例を除き、マスクや建物はスコアしない	<例外>・テント・要塞、砦・イグルー（かまくら）・かまぼこ形兵舎・アーチ
Ⅹ	握ったり、抱えたりする道具はスコアしない	ペンチ・ピンセット・トング
防衛反応の追加例		バスケット・湾、入江・ベル、鐘・本・ブックエンド・瓶・泡・鳥かご、檻・ロウソク立て・洞窟、洞穴、地下蔵・繭・山の中の洞穴・カーテン、幕・ベールを纏った踊り手・ケーキの上の霜・毛に覆われたプードル・手袋・港・かぶり物、頭飾り・歩道の柵・ヘルメット・入海、瀬戸・島に囲まれた湖・水に囲まれた島・雪に覆われた山・ネット・ポット・皮・スクリーン・スプーン・壺、かめ、骨壺・壁・壁紙・かつら

表 1-b　Body image Ego Boundary の採点基準（Fisher & Cleveland 1958）

Penetration Score		
採点基準		反応例
Ⅰ	出したり、入れたりするために用いられる口、あるいは開いている口に関係したもの	・食べている犬・あくびをしている犬・舌を出している人・嘔吐する人・唾を吐く少年・口を開けている人・水を飲む動物
Ⅱ	物の側面を潜り抜け、突き抜け、浸透し、内部に入り込むことに関係したもの	・X線・内視鏡・臓器の断面・身体内部・検視解剖
Ⅲ	こわれたり、砕かれたり、痛めつけられ、傷つけられたりした身体外部に関係したもの。また表面の変質に関係したもの	・つぶれた南京虫・怪我した人・出血した人・傷・肉に貫通した小銃弾・病気におかされた皮膚・皺のできた肌・枯葉・腐った物
Ⅳ	しっかりした境界がなかったり、何かが吹き出ている大地にある穴	・底なしの深淵・水の吹き出た泉・間欠泉・噴出油井
Ⅴ	すべての穴	・肛門・子宮口・扉・入口・喉・鼻孔・膣・窓
Ⅵ	実体がなく、はっきりした境界がないもの	・綿あめ・幽霊・影・柔らかな泥
Ⅶ	透明性に関するもの	・透けているドレス・透明窓
他の浸透反応の例		・木の上で食べている動物・解体された蝶・出入口・解体された魚・引き裂かれた毛皮のコート・破れた羽・何かを突いているバッタ・港の入口・排泄している人

３．３　B%と P% の差について

これまで、身体像得点によって示されるＢスコアとＰスコアのどちらが優位であるかに関して、Ｂスコアが境界の明確さを表わし、Ｐスコアは境界が弱くなっていることを表すという Fisher ら（1968）の考えに基づき、Ｂ＞Ｐの関係が望ましいとされてきた。

これに対して吉川（1990）は「Ｐは境界の疎通性を意味するものであり、このスコアがないことは、想像力をかきたてるような刺激さえも通過できない境界をもつと思われる」とし、Ｐ＝０群が、「現実生活への興味の幅が狭いこと」「行動面での柔軟性に乏しい人」であるとし、また情緒象徴法によって比較を行った結果では「不安感情、不快感情がＢ≦Ｐ群よりも優位に少なく中性感情が多いこと」を示し、「Ｂ＜Ｐ群の境界は刺激を受け入れる疎通性をもち、情緒的豊かさにつながる」と述べている。これらのことから、「Ｂスコアとｐスコアの差が大きいことと自我境界の強さ、差が小さいことと情緒的側面の弱さに関連がみられ、この差が大きいことはＢ%、差の小さいことはＰ%の影響を強く受けていることが伺われるため、両スコアの差を求めるよりもむしろ各スコアを独自に注目するほうが望ましい」と指摘する。

４．現実感覚について

４．１　現実感覚の基礎概念

Weiner（1973）は、「現実との関係は、基本的には現実を検討する能力と、現実について妥当な感覚を保持する能力の２つの主な構成分子をもった知覚過程である」と述べている。これは、「現実検討」と「現実感覚」の２側面から検討されている。Weiner の定義するところでは、現実検討とは、「環境に対する正確な知覚作用からなり、それが損なわれると、自閉的知覚や、十分でない判断力が認められ、一般に行われている反応様式を認知できなくなる。」また、「外部世界の知覚･認知と、内面世界の想像･空想・願望を区別する自我機能」でもある。

４．２　グラフィック・ロールシャッハ

グラフィック･ロールシャッハ（以下､G.R. と略）とは、Levine, K.N と Grassi, J.R. によって 1942 年に提出された特殊な施行法である。Klofer, B（1956）はこの技法を「統合失調症の

現実吟味の障害を明確にするうえで有効である」とし、Piotrowski, Z.A（1943）は、「ロールシャッハ・テスト本来の実験的性質について考えていくうえで意義深い」と評価している。しかし実際のテスト場面で質疑段階の一助として用いられるなど、その有効性は認められているものの、研究報告は少ない。

Levine と Grassi（1942）は、正常群のほか統合失調症をはじめとして各臨床群に対して G.R を施行し検討した結果、描画がブロットの形態へ硬く固執し、実質的にはブロットの模写であるような「ブロット優位な反応」と、ブロットの形態を無視した被験者のイメージのみで構成される「概念優位な反応」の両極を想定した。そして通常の描画は反応に適した若干の修正を伴うブロット各要素と描画の対応が認められた（ブロット―概念間のバランスのとれた反応）。これらに中間点を２つ加え、ブロット優位から概念優位まで５段階の尺度（表 2）を設けた。Levine & Grassi によれば、尺度Ⅰ（輪郭）で概念優位となり尺度Ⅴ（付加）でブロット優位となるようなパターンは精神神経症に度々生じ、精神病群では５つの尺度間での評定にバラつきを示し、器質疾患群ではブロット優位へ偏るなどの特徴がみられると報告している。

表 2　G.R. の評定法（Grassi & Levine, 1942）

Ⅰレベル	ブロットに固執し、本質的にはブロットの模写である描画
Ⅱレベル	Ⅰレベル程強くはないがブロット優位の描画
Ⅲレベル	ブロットと概念のバランスのとれた描画
Ⅳレベル	Ⅴレベルほど強くはないが概念優位の描画
Ⅴレベル	ブロットとの一致がまったく認められず被験者のイメージだけで構成された描画

４．３　日本におけるグラフィック・ロールシャッハ研究

本邦における G.R. 研究は、田形（1986, 1987, 1988）によって中心となって研究している。田形は、Levine & Grassi の原法に準拠し、Levine らの評定レベルによって得られた描画を分類した。その結果、各被験者間でも評定レベルにバラつきがみられることがわかり、各被験者による類型化を試みた（表 3）。

表 3　G.R 分類基準

	type	評定レベル		
		Ⅰ・Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ・Ⅴ
↑	B 型	多い	30% 以下	少ない
ブロット優位	B’ 型	多い	30% 以上 50% 未満	少ない
	A B 型	多い	50% 以上 65% 未満	少ない
	A 型	少ない	70% 以上	少ない
	A’ 型	少ない	65% 以上 70% 未満	少ない
	A C 型	少ない	50% 以上 65% 未満	多い
概念優位	C’ 型	少ない	30% 以上 50% 未満	多い
↓	C 型	少ない	30% 以下	少ない
	M x 型	上記のいずれも該当しない		

（田形 , 1986）

類型化の研究は小学生・大学生を対象としており、結果として、小学生では全てのタイプが出現し、両極のB型、C型もかなりの頻度でみられるが、大学生では両極のB型、C型やMx型は見られなかった。全体的な傾向として概念よりの型が多いが、同時にブロット―概念間のバランスのとれた反応もある程度備えているのが大学生の特徴となっている。

また他に、野島・足立（1970）の研究や、前田ら（2001）が視知覚の体制化の神経心理学的検査法として用いた「グラフィック・ロールシャッハテスト（慶應版）」などもある。

田形（1986）によれば「ブロットと概念間のバランス、あるいはそこからの偏りの度合を評定するものであり、この＜ブロット―概念のバランス＞という着想に対してPiotrowskiが『Ror.法本来の実験的性質について考えていく上で意義深い』と評価した」と指摘している。すなわち、被験者は白紙の上に反応を描画するのではなく、トレーシング・ペーパーを図版に重ねる手続きにより＜ブロット―概念間のバランス＞を測られることになる。これにより「被験者はブロットと概念の両方向に対してほどほどの妥協をしながら描画することになる。つまり、描画を観察することで、われわれはブロットと概念のバランスの度合いや妥協の程度を測ることができる」（田形, 1986）のである。

この「妥協の程度」は、すなわち現実感覚であり、現実の中で受けた刺激をどのように折り合いをつけて自身の中に取り入れるかという能力であるといえる。このように臨床的意義が多くみられるG.Rであるが、前述したように研究は多くはなされていない。しかし研究者によって独自の方法が工夫され改変されている。そこで、本研究では実施法において独自の開発を試みることとした。詳細は、「6.3(3)デジタル・グラフィック・ロールシャッハ法の内容および施行方法」に記載する。

5．優位感覚について

5．1　優位感覚の概念

「優位感覚」とは、物事を捉えるとき優勢に用いている感覚のことであり、それは各個人で異なるとされている。すなわち、同じ事象に対しても、物事の受け止め方や見え方は、その個人が優位に用いている感覚によって異なるということである。「人が五感を用いて情報を取り入れ、蓄積し整理する方法―見る、聞く、感じる、味わう、嗅ぐ―を神経言語プログラミング[5]（Neuro-Linguistic Programing　以下、NLPと略す）では、「表象システム」という。

この優位感覚によって、人が何かを感じたり、考えたりするときに「絵で考える人」もいれば「音や体感で考える人」もいる。また、自分の記憶を辿るとき、映像として視覚的な記憶が印象に残る人もいれば、寒さや温もりなどの身体感覚や、流れていた音楽といった聴覚としての印象が残りやすい人もいる。そういった考えたことを伝えるために、感覚に基礎を置いた言葉のことをNLPでは叙述語という。高橋（1997）は、「どの叙述語を使っているかによってその人の優先的表象システム（優位感覚）を知ることができる。」と述べている。

5．2　優位感覚の測定―叙述語テスト

優位感覚の測定方法として松田（2013）は、「叙述語テスト」を開発した。彼女によれば、叙述語とは「感覚をもとにした言葉」であり、「人の内面や思考、認知のスタイルを研究するために、感覚・知覚を反映させている叙述語を用いることは妥当である」として、認知言語学的な考えを基に研究を行った。松田が作成した叙述語の具体例を表4に示す。

松田の研究（2013）では、18歳から51歳までの59名の女性を対象に（大学生、大学院生、社会人）「叙述語テスト」を用いて優位感覚を算出し、各感覚の優位性におけるストレスコーピングスタイルの検討を行った。結果は次のように分類された。「視覚優位」群25名、「聴覚優位」群11名、「身体感覚優位」群13名、「視

覚聴覚同優位」群６名、「視覚身体感覚同優位」群３名、「聴覚身体感覚優位」群１名。また各群のストレスコーピングの特性について次の特性を示した。すなわち、「視覚優位群・聴覚優位群は、距離を取ることで問題の全体像を知的に理解し把握することができる。視覚・聴覚は高次の感覚であるため言語化や概念化に近く結びつきやすい。その一方、身体感覚優位群は『問題解決積極性』が高く対象との距離も近いと考えられるため、問題に対して直接的に解決を目指す傾向がみられている。身体感覚は視覚・聴覚とは異なり言語には結びにくい」。

表４　叙述語の具体例

視覚
視る、絵、焦点、創造、眼識、場面、空白、描く、見晴し、輝く、反射する、明らかにする、調べる、見つめる、焦点を合わせる、見通す、幻覚、図示する、注目する、見通し、暴露する、下見、見る、示す、探査する、心に描く、見張る、啓示、かすんだ、暗い、フォーカス、洞察、光景、視覚化する、観点、反映する、目、集中する、予見する、明示する、眺望、あらわにする、試写を見る、見せる、調査する、ヴィジョン、観察する、ぼんやり、外観、光り輝く、色彩豊か、ほのくらい、チラッと見る、ハイライト、錯視、照らす、不明瞭な、暗くする、概観、輝き、スポットライト、監視する、鮮やかな、鏡、明らかに、光りを当てる
聴覚
言う、アクセント、リズム、（音が）大きい、音調、共鳴する、音響、単調な、聾の、鳴り響く、尋ねる、強調する、聞き取れる、澄んだ、討議する、告げる、批評する、聴く、響き、怒鳴る、無言の、声の、話す、沈黙、不調和の、調和した、（声、音が）鋭い、静かな、うるさい、大声の、トーン、音、聞く、口調、ピッチ、はっきり聞こえる、話し合う、宣言する、泣く、述べる、耳を傾ける、鳴らす、叫ぶ、ためいき、キーキーいう、ことばがない、クリック、しわがれ、声を出す、ヴォーカル、ささやく、伝える、静寂、もぐもぐ言う、コメント、叫ぶ、旋律的な、調子、泣き言をいう、ハーモニー、耳をかさない、曲、音楽的な、アコースティックな、ブンブン言う、ぺちゃくちゃしゃべる、対話、エコー、うなる、にぎやか、騒がしい、ピンとくる、語る
身体感覚
触る、扱う、接触させる、押す、擦る、堅い、温かい、冷たい、粗い、捕まえる、押し、圧力、敏感な、歪み、手応えのある、緊張、感触、固まった、柔らかい、掴む、握る、創る、堅固な、重い、滑らか、苦しむ、触れる、いじる、バランス、壊す、冷たい、感じる、しっかりした、打つ、くすぐる、縛る、安定している、熱い、ジャンプ、プレッシャー、走る、取りかかる、ぐいと掴む、鋭い、ストレス、べとべとする、行き詰った、たたく、実体的な、緊張、振動する、触れあい、歩く、具体的な、やさしい、つかまえる、かかえる、がっしりとした、スムーズ、グザッと、骨の髄まで、香りのある、匂いがする、かび臭い、魚臭い、鼻を突っ込む、かぐわしい、煙臭い、新鮮な、うさんくさい、苦しい、甘い、しょっぱい、うまい、辛口

（松田 , 2013）

６．研究目的と方法

６．１　研究目的

創造的退行を自我境界、現実感覚、優位感覚との関連性において調査研究を試みる。創造的退行の特性を研究することは病的退行すなわち精神病的な心性を探る手がかりとなり、人の精神状態をみるのに重要な概念である。

従来の研究では、対象が「芸術家」と一括りにされ、表現手法の専門性による比較はあまり行われていない。しかし、Ludwig（1995）らが明らかにしたように専門とする表現手法によって創造的退行のありようにも違いがあるのではないかと考えられる。本研究は、芸術家の専門性を３群（身体表現家、画家、音楽家）に分け、より詳しくその特性を研究する。さらに、新たな施行法としてデジタル・グラフィック・ロールシャッハを導入し、これらの関連性を調査することを目的とする。

研究仮説を下記に記す。

【研究仮説】

(1) 創造的退行と自我境界の関連

芸術家は、防壁的な自我境界を有するとされる正常群および浸透的な自我境界を有するとされている精神病群と比較して、柔軟で堅固な自我境界をもつのではないか。また、芸術家の専門性によって自我境界のありように差があるのではないか。

(2) 創造的退行と現実感覚の関連

芸術家は、創造的退行が優位に機能しやすく、現実（ブロット）と自身のいだくイメージ（概念）との間にバランスのとれた反応を示すのではないか。

(3) 創造的退行と優位感覚の関連

芸術家が選択する表現手法は優位感覚に関係しているのではないか。すなわち、身体表現者は身体優位、画家は視覚優位、音楽家は聴覚優位であるのではないか。

(4) 創造的退行の意識面と自我境界の関連

芸術家が自身のもつ創造性の発露に対していだいているイメージを回答し、その内容に沿って、「内発型」、「外発型」、「両方向型」に 3 分類する。それが当人の有する自我境界のタイプ（B タイプ＜防衛反応優位＞、P タイプ＜浸透反応優位＞、B-P タイプ＜両価的＞）と関連があるのではないか。

6．2　対象者

芸術家として専門的に活動している 27 名（身体表現群 10 名、画家群 10 名、音楽家群 7 名）を対象とする。（内訳詳細　表 5）

表 5　被験者の比率

男女比		%
Male	9	33
Female	18	67
Total	27	100

年齢比		%
20 代	4	15
30 代	8	30
40 代	11	40
50 代	4	15
Total	27	100

活動年数		%
～ 9	1	3.5
10 ～ 19	11	41
20 ～ 29	6	22
30 ～ 39	8	30
40 ～	1	3.5
Total	27	100

6．3　方法

(1) 調査時期および場所

2015 年 6 月 1 日から同年 9 月 29 日にかけて、主に本学東洋英和女学院大学大学院の教室、あるいは被験者の都合に応じて自室や静かな状況が確保できる個室等を利用して調査を行った。

(2) ロールシャッハ法の施行方法

Klopfer 法に準拠して Ror. 法を施行し、スコアリングをした後、さらに各プロトコルについて身体像得点を適用する Ror. 法のスコアリングや解釈に関しては、高橋（1981）の正常群と精神病群を比較データとして用いる。

本研究では、反応内容のカテゴリーとして「Thinking Process（T.P）」という項目を設けた。これには Klopfer 法では反応内容として、カテゴリーには分類することができない、感想（e.g.「この絵は気持ちいい」「色はいっぱいあるけど、賑やかじゃない。楽しい感じじゃない。ここが雑踏っぽい」）、物語的（e.g.「エロスとタナトス。生きているということ。死んでいるということとか。共生」）、自己に関連する内容（e.g.「この人（右）は私の中で、嘘です。嘘をついている人はいないけど、鏡の中の人みたい」）といった反応をスコアリングしたものである。これは、Weiner の考案した「作話的反応」に準ずる内容であるが、他の反応カテゴリーでは分類できないものに限る点で独自のカテゴリーとなる。

(3) デジタル・グラフィック・ロールシャッハ法の内容および施行法

本研究では、従来法による負担の軽減とスムーズな施行の可能性を考慮してタブレット型パソコンを用いたデジタル・グラフィック・ロールシャッハ（D.G.R.）の導入を試みる。

また、D.G.R. の描画の分類に関しては、臨床心理学専攻の大学院生４名を評定者とし、描画した被験者が判らないようにブラインドにした状態で評価を行った。評価は、Levine & Grassi の評定法（表 2）に従って、得られた描画全てをⅠ～Ⅴの５段階に分類した。なお、評定者間で５段階評価にズレが生じた場合は話し合いにより評価を確定した。また、５段階の分類した描画を田形（1986）の手法（表 3）に拠って類型化し、その結果から「概念優位」「ブロット優位」「ブロット－概念バランス型」を算出する。

以下、D.G.R の操作手順を明記する。

【D.G.R の手順例】

(i)タブレット機器に 10 枚の Ror. 図版を読み込み、各図版ごとに図版レイヤーを作成し、透過度を調整する

(ii)レイヤーを重ねて描画レイヤーを作る

（図 1）

図１（模擬図版）

(iii)自由反応段階の後、デジタイザーペンを使用して反応を描画。（図 2）

図２

(iv)別レイヤーで次の反応を描画する（図版レイヤー非表示時）（図 3）

図３

(v)反応を描画し終えたら、次の図版に切り替える

※ 同作業を 10 枚の図版に対して行う（図 4）

図４（模擬図版）

7．結果と考察

7．1　ロールシャッハのスコアにみる創造的退行

全体のスコアと正常成人、精神病群のスコアリングを表6に示す。正常成人に比べると、①R数の多さ、反応領域の②Dd％の高さ、決定因として、③F＋％の低さ、④Σcの高さ、⑤ΣC、SumCの高さ、反応内容では、⑥At%の高さが顕著にみられた。高橋（1981）の標準データでは、精神病群のデータが正常成人よりDd%を除いて低い値となっている。

また、被験者群と精神病群を比較すると、P反応、W%、ΣMにおいて精神病群の方が高い得点となっている。総反応数（R）の平均は、被験者群の方が圧倒的に多いのに対してP反応は精神病群の方が多いということは、被験者群の方が反応内容のバラエティに富んでいることが伺える。M反応に関しては、人間運動反応（M）において精神病群より被験者群の方が高い得点であるため、人間運動反応以外（動物運動反応もしくは無生物運動反応）において精神病群の方が高いことがわかる（表6）。

表6　全被験者のRor.法の主なスコアリング（正常群、精神病群との比較）

No.	専門	R	P	W%	D%	Dd%	S%	F+%	Σc	ΣM	ΣC	M	SumC	C'	H%	A %	At%
1	音楽	21	4	61.9	33.3	4.8	0.0	100.0	6	1	5	0	5	0	4.3	60.9	8.7
2	音楽	61	2	37.7	37.7	23.0	1.6	10.8	10	8	4	6	3	1	11.7	20.0	5.0
3	音楽	48	3	64.6	27.1	8.3	0.0	60.0	2	4	18	4	19.5	3	10.4	25.0	8.3
4	音楽	44	4	59.1	29.5	0.0	0.0	75.0	13	5	6	2	3.5	1	18.2	36.4	4.5
5	音楽	37	4	32.4	29.7	35.1	2.7	31.6	3	11	3	2	2.5	1	2.7	64.9	2.7
6	音楽	33	4	51.5	45.5	0.0	3.0	40.0	9	2	5	2	5.5	17.1	14.6	2.4	0.0
7	音楽	33	2	72.7	24.2	3.0	0.0	61.5	3	2	14	2	10.5	0	17.6	20.6	2.9
8	絵画	34	2	61.8	17.6	11.8	8.8	26.3	6	7	2	5	1	0	20.6	47.1	11.8
9	絵画	20	4	60.0	40.0	0.0	0.0	100.0	5	6	1	3	0.5	1	19.0	19.0	0.0
10	絵画	18	3	61.1	38.9	0.0	0.0	75.0	1	2	2	1	2.5	0	11.1	66.7	5.6
11	絵画	18	3	72.2	16.7	11.1	0.0	66.7	3	0	5	0	6.5	1	5.6	33.3	16.7
12	絵画	22	6	77.3	18.2	0.0	4.5	57.1	5	5	3	2	2.5	0	20.0	32.0	0.0
13	絵画	42	3	42.9	16.7	31.0	9.5	35.0	10	9	2	5	1	1	11.6	32.6	0.0
14	絵画	16	4	31.3	18.8	50.0	0.0	70.0	0	3	3	0	3	0	12.5	75.0	6.3
15	絵画	128	2	25.0	21.9	48.4	4.7	11.3	23	24	6	15	3.5	3	19.5	57.8	2.3
16	絵画	79	5	13.9	50.6	27.8	7.6	45.7	15	8	9	4	8	1	5.0	45.0	2.5
17	絵画	17	3	58.8	35.3	5.9	0.0	75.0	4	5	4	2	4	0	11.8	35.3	11.8
18	身体表現	38	4	57.9	39.5	2.6	0.0	50.0	11	1	8	1	7	1	7.9	36.8	5.3
19	身体表現	99	3	40.4	36.4	36.4	3.0	46.2	26	18.0	9.0	11.0	6.5	3.0	17.0	18.0	7.0
20	身体表現	49	3	71.4	28.6	0.0	0.0	3.6	6	6	6	5	5.5	0	17.0	38.3	2.1
21	身体表現	38	3	28.9	47.4	13.2	10.5	26.3	4	9	6	4	5	0	21.1	26.3	5.3
22	身体表現	21	4	76.2	23.8	0.0	0.0	45.0	4	4	2	2	1	1	25.0	66.7	4.2
23	身体表現	38	3	57.9	18.4	21.1	2.6	29.4	11	4	4	0	3.5	1	2.6	36.8	18.4
24	身体表現	37	6	56.8	35.1	5.4	2.7	46.7	8	5	7	3	5.5	1	16.2	59.5	2.7
25	身体表現	33	4	51.5	45.5	3.0	0.0	56.3	8	2	8	1	6.5	1	4.8	19.0	14.3
26	身体表現	14	1	50.0	28.6	21.4	0.0	16.7	2	3	3	2	1.5	0	14.3	14.3	7.1
27	身体表現	37	5	62.2	35.1	2.7	0.0	77.8	2	2	14	2	10.5	1	2.4	53.7	4.9
Average		39.8	3.5	53.2	31.1	13.6	2.3	49.6	7.4	5.8	5.9	3.2	5.0	1.4	12.8	38.6	5.9
Nomal*		31.7	6.6	54.3	39.4	3.5	3.1	82.8	2.8	9.8	3.6	4.8	2.9	0.7	16	38.5	0.7
Schizophenic*		26.7	4.5	53.5	38.5	5.8	2.2	51.5	1.9	6.3	3.8	2.9	3.7	0.9	13.6	38.2	0.8

（* 高橋 , 1981）

総反応数（R）に関して高橋（1981）の資料によれば、正常成人の平均は31.7、標準偏差13.0であり、正常成人→精神病→神経症→犯罪者の順に反応数の平均数は少なくなっていく。それに対して、本研究の平均は39.8、標準偏差25.7であり、標準偏差が大きくrange ＜14－128＞と、非常に個人差が大きいことがわかる。高橋の正常成人のRは21～39の範囲であり、本研究の被験者27名のうち15名がこの範囲に入らなかった（21未満が7名、39以上が8名）。そのうち専門別でみると絵画群が特徴的で、正常域に入ったのが2名のみで21未満が5名、39以上が3名であり、そのうち2名は79、128と極端に多い反応数であった。高橋は、Rが50以上の場合「異常部分反応を伴うことが多く、強迫傾向の強い人や芸術家や高知能であったりする」と述べている。R数が少なかった被験者の反応をみると、とくに画家がブロットに対して、じっくりと吟味することが多かった。例えば、「何かに見ようと思えば見えなくはないが、私の気持ちを動かすほどの絵ではない」といった反応や、「細かいディティールに目がいってしまって、これはどういう配分で滲みをだすのか気になる」といった反応など、画家という専門性が反応に作用していることも考えられる。

次に決定因の特徴をみると、F＋％が正常82.6に対して本研究の被験者は全体平均で49.6と低く、身体表現群は39.8とさらに低かった。Piotrowski（1957）は、「高いF＋％を示す者は行動に一貫性があり、行動を予測することが可能であるが、これに対して低いF+%を示す者の行動様式はむら気で予測できない」と述べている。これを創造的退行の観点で捉えると、現実に固執していたら創造性は生まれてこないと考えられ、通常予測できない行動をとることも創造性のあり方のひとつと捉えることができる。よって、F＋％の低さが一次的退行として、創造的退行を示す指標となると考えられる。

Σcは濃淡反応の総数である。濃淡反応は接触感覚を生じた反応であり、Klopferは「愛情欲求や依存欲求のような安全を求める欲求の処理の仕方を表す」と述べている。さらに、濃淡反応の多さと感受性の高さの関連も指摘されている。そして、ΣC、SumCは色彩反応の指標であり、色彩反応は、①被験者の感受性や感情の表現力、②他人との接触、③外界と自己とのを区別する能力、④衝動や行動に対する統制力、と考えられている。色彩反応の多い人は一般に、感受性が豊かで表現力に富み、自分の衝動を適切に統制することができ、他人と暖かい人間関係を維持できる人といわれている。

最後に、反応内容について考察する。高橋によれば、これまでの研究により被験者の職業的興味や関心が反応内容に影響することが挙げられている。よって医師や看護師などの医療従事者にはAt（解剖反応）が出現しやすいとされている。芸術家群でAt％が高かったことについて今回の被験者の反応からわかることは、興味関心が身体の本質としての骨格であり、内臓に向いていることに関連することが伺われた。例えば、画家の勉強をした後に、身体への興味から舞踏家となった被験者は、日頃から身体を全て骨格から捉えようとしているために、10枚のブロットのうち5枚に骨盤（特に仙骨）を見ている。これは、Holt（1977）の「一次過程表象尺度」で挙げられている反応様式の「自閉的論理」に属する反応である。これは刺激に対して自分に引きつけた論理づけをする反応であり、特に画家が自身の作品のテーマや素材などと関連ある反応を示すことが報告されている。本研究でも「自閉的論理」は画家に多くみられた。

以上のことから、芸術家群のRor.法をみた結果、創造的退行の指標として考えられる特徴として、①反応領域ではW%が保たれた上でのDd%の高さ、②決定因ではF+%の低さとc%の高さ、③反応内容ではAt％の高さと、「T.P.」にカテゴライズした刺激に対する個人的な感情や、自己に関連づけた物語といったいわゆる独創反応の多さ、があげられる。また以上

のような特徴を示しつつＰ反応が平均値あることも、創造的退行を示唆する要因として挙げられる。

７．２　自我境界、現実感覚、優位感覚との関連性からみる創造的退行

(1) 創造的退行と自我境界の関連性において、芸術家は防壁的な自我境界を有するとされる正常群、および浸透的な自我境界を有するとされている精神病群と比較して、柔軟で堅固な自我境界を有していることが示唆された（表 7-a)。また芸術家の専門別による自我境界のありようの差異において音楽家群と画家群はＰスコアとＢスコアの数値が同等もしくは高く、身体表現群ではＰスコアが有意に高かった（表 7-b,c)。

表 7-a　総反応数と身体像得点の結果（芸術家群、正常群、精神病群との比較）

	Total R		Barrier		Penetration	
	Mean (SD)	Median (range)	Mean (SD)	Median (range)	Mean (SD)	Median (range)
Artist	39.81 (25.65)	37.00 (14-128)	7.89 (5.59)	7.00 (0-27)	7.11 (3.38)	6.00 (2-13)
Nomal *	30.42 (12.09)	27.24 (13-66)	7.97 (3.90)	7.39 (1-20)	2.66 (2.16)	2.33 (0-11)
Schizophenic*	19.50 (7.59)	18.00 (10-45)	3.23 (2.14)	3.00 (0-10)	2.43 (2.22)	2.00 (0-10)

(* 木場 , 1980)

表 7-b　総反応数と身体像得点の結果（芸術家群における専門性別の比較）

	Total R		Barrier		Penetration	
	Mean (SD)	Median (range)	Mean (SD)	Median (range)	Mean (SD)	Median (range)
Music (7)	39.6 11.9	37.0 (21-61)	7.57 4.0	6.0 (5-17)	6.14 1.5	6.0 (4-8)
Paint (10)	39.4 34.8	21.0 (16-128)	9.6 7.6	7.0 (0-27)	6.3 3.6	4.5 (3-13)
Body (10)	40.4 21.6	37.5 (14-99)	6.4 3.1	7.0 (2-13)	8.6 3.6	10.0 (2-13)

表 7-c　専門性間の身体像得点の比較結果

	B ≧ P		B < P	
	% (n)	p	% (n)	p
Music (7)	36.8% (7)	▲ *	0% (0)	▽ *
Paint (10)	42.1% (8)		25% (2)	
Body (10)	21% (4)	▽ **	75% (6)	▲ **
Total	100% (19)		100% (8)	

*…P ＜ .05　　**… P <.01

▲は有意に多い、▽は有意に少ない

(2) 現実感覚との関連において芸術家群は＜現実（ブロット）と自身のいだくイメージ（概念）のバランスのとれた反応＞を示さず、ブロット優位と概念優位の両極が一緒に存在する（Mx型）が最も多い結果となった（表 8-c）。また D.G.R における現実感覚は F+% と関連があり、概念優位の被験者では F+% が有意に低くなる結果となった。さらに、現実感覚は P スコアとの関連がみられた。

表 8-a　G.R. の類型化結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	total	Ⅰ%	Ⅱ%	Ⅲ%	Ⅳ%	Ⅴ%	type
1	0	6	3	3	3	15	0%	40%	20%	20%	20%	Mx
2	1	9	6	8	13	37	3%	24%	16%	22%	35%	Mx
3	0	2	4	7	9	22	0%	9%	18%	32%	41%	Mx
4	1	8	8	5	5	27	4%	30%	30%	19%	19%	Mx
5	1	7	10	5	1	24	4%	29%	42%	21%	4%	B’
6	0	0	0	5	20	25	0%	0%	0%	20%	80%	Mx
7	0	4	7	5	4	20	0%	20%	35%	25%	20%	C’
8	0	5	9	8	4	26	0%	19%	35%	31%	15%	C’
9	0	7	1	2	0	10	0%	70%	10%	20%	0%	B
10	0	4	5	1	3	13	0%	31%	38%	8%	23%	Mx
12	0	3	8	3	5	19	0%	16%	42%	16%	26%	C’
13	0	2	5	5	10	22	0%	9%	23%	23%	45%	Mx
14	0	0	2	4	5	11	0%	0%	18%	36%	45%	Mx
15	0	0	7	15	22	44	0%	0%	16%	34%	50%	Mx
16	0	1	12	17	13	43	0%	2%	28%	40%	30%	Mx
17	2	8	4	0	0	14	14%	57%	29%	0%	0%	B
18	0	2	4	2	0	8	0%	25%	50%	25%	0%	Mx
19	0	4	13	14	15	46	0%	9%	28%	30%	33%	Mx
20	0	0	0	3	13	16	0%	0%	0%	19%	81%	Mx
21	0	10	5	2	1	18	0%	56%	28%	11%	6%	B
22	2	9	4	3	0	18	11%	50%	22%	17%	0%	B
23	0	2	4	7	4	17	0%	12%	24%	41%	24%	Mx
24	1	7	4	2	2	16	6%	44%	25%	13%	13%	B
25	0	1	5	9	9	24	0%	4%	21%	38%	38%	Mx
26	0	0	1	3	5	9	0%	0%	11%	33%	56%	Mx
27	0	0	7	9	12	28	0%	0%	25%	32%	43%	Mx
total	8	101	138	147	178	572						
%	1	18	24	26	31	100	1%	18%	24%	26%	31%	

表 8-b　G.R. の分類結果

（%）

分類	芸術家群	小学生群 *	大学生群 *
Ⅰ	8　(1)	7　(3)	9　(1)
Ⅱ	101　(18)	86　(23)	118　(12)
Ⅲ	138　(24)	163　(43)	562　(58)
Ⅳ	147　(26)	54　(14)	259　(27)
Ⅴ	178　(31)	65　(17)	17　(2)
Total	572　(100)	375　(100)	965　(100)

(* 田形 , 1986)

表 8-c　G.R. の類型分類結果

（%）

Type	B 型	B' 型	AB 型	A 型	A' 型	AC 型	C' 型	C 型	Mx 型	Total
芸術家	5（19）	1（4）	0（0）	0（0）	0（0）	0（0）	3（12）	0（0）	17（65）	26（100）
小学生 *	3（11）	2（7）	4（15）	4（15）	2（7）	3（11）	1（5）	6（22）	2（7）	27（100）
大学生 *	0（0）	3（9）	2（6）	7（22）	7（22）	7（22）	6（19）	0（0）	0（0）	32（100）

（* 田形 , 1986）

精神病群の類型化の結果として田形は言う。すなわち、「ブロットと概念間のバランスのとれた A 型、A' 型が全体の 6% しかみられず、両極の B 型、C 型がそれぞれ 20% みられ、Mx 型が 24% と最も多く、ブロットと概念間のバランスがとれないのが S 群（精神病群）の特徴といえる」（図 5-b）。

	Artist	Normal *	Schizo-phrenic *
Ⅰ	1	0	1
Ⅱ	18	7	36
Ⅲ	24	63	31
Ⅳ	26	28	22
Ⅴ	31	2	10

（* 田形 , 1990）

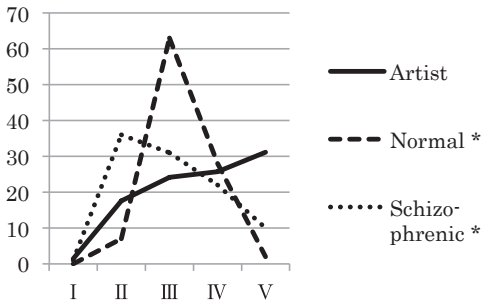

図 5-a　G.R. の分類結果（精神病群との比較）

（%）

Type	B 型	B' 型	AB 型	A 型	A' 型	AC 型	C' 型	C 型	Mx 型
Artist	19	4	0	0	0	0	12	0	65
Normal *	0	3	1	50	13	13	3	18	0
Schizophrenic *	20	10	10	3	3	3	7	20	24

（* 田形 , 1990）

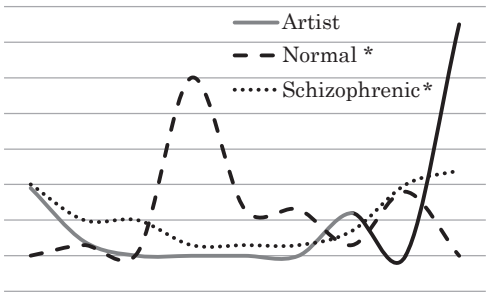

図 5-b　G.R. の類型分類結果

(3) 芸術家が選択する表現手法と優位感覚の関連性は見られなかった（表 9-a)。正常群と比較すると、芸術家群では身体感覚優位を有する割合が多い結果となった（表 9-b)。

表 9-a　優位感覚と専門のクロス表

	優位感覚		Total
	視覚優位	身体感覚優位	
	% (n)	% (n)	% (n)
Music	15.3% (4)	11.5% (3)	26.9% (7)
Paint	19.2% (5)	15.3% (4)	34.6% (9)
Body	19.2% (5)	19.2% (5)	38.4% (10)
Total	53.8% (14)	46.1% (12)	100% (26)

表 9-b　芸術家群と正常群の優位感覚の比較

	Total	視覚優位		聴覚優位		身体感覚優位		同優位	
	n	n	%	n	%	n	%	n	%
芸術家群	27	14	51	0	0	12	44	1	3
正常群 *	59	25	42	11	18	13	22	10	16

(* 松田 , 2013)

(4) 創造的退行の意識面との関連において自我境界との関連性は認められなかった。画家群は外発型が多く、また身体表現群では内発型が有意に多く見られた（表 10)。

表 10　意識的創造の方向性と専門のクロス表

	意識的創造性				Total
	内発型		外発型		
	% (n)	p	% (n)	p	% (n)
Music	71.4% (5)		28.6% (2)		100% (7)
Paint	50% (5)	▽ *	50% (5)	▲ *	100% (10)
Body	100% (9)	▲ *	0	▽ *	100% (10)

*…P ＜ .05

▲は有意に多い、▽は有意に少ない

※ 身体表現群で 1 名が無回答

以上の研究仮説をまとめて考察すると、創造的退行は、防壁的で賢固かつ浸透性のある柔軟な自我境界のありようを示した。これは Landis（1970）の“自我の弾力性”に相当し、状況に応じて自我境界を緩めて外的刺激やインスピレーションに対して浸透的である一方、自我の統制力は失わないという特性を表すものである。これはまた、「芸術家が創作をするとき、より無意識的なレベルに退行すると同時に、他者に通じる表現を作りあげるという現実的作業を求められる」（飯島 , 2010）という創造的退行の働きと一致する自我のありようを示すものである。

また、G.R における現実感覚に関して田形（1990）は、「概念優位とブロット優位が一緒に存在する＜ Mx 型＞は精神病群の特徴」として

おり、現実吟味の障害の指標として、Rapaport（1946）の「逸脱言語表現」の距離の喪失と増大の関連性を示唆している。本研究において芸術家群は、このMx型が精神病群以上の65％を占める結果となった。これは、Ror.法におけるF+%の低さという特徴と合わせても、創造的退行において現実感覚の低下が見られることを示すものである。芸術家群がD.G.Rすなわち描画という創造的な行為によって退行がさらに促進され、現実感覚が精神病群以上に低下することが示されている。これはまた、自我境界のＰスコア（浸透度）との有意差が認められ、関連が高いことが示された。すなわち、自我境界の浸透度の高い芸術家群がRor.法によってあいまいな刺激に曝され、D.G.Rで描画という創造的行為に直面したとき、現実感覚が一時的に著しく低下することが明らかになった。さらに正常成人に比べて芸術家群は、「身体感覚優位」を示す割合が高いことが示された。

優位感覚の示すところを考察すると、視覚と聴覚が「高次な感覚」とされる一方、身体感覚は「低次な感覚」とされている。松田（2013）はこのTellenbach（1890）の考えを引用して言う。すなわち、「もっともモダリティの拡張が大きく言語表現の幅が広いと考えられる視覚は、対象との距離が遠く、距離をとって観察する傾向が伺える。一方で、モダリティの拡張が小さく言語表現の幅も狭いと考えられる臭覚、味覚、触覚といった身体感覚は、対象との距離が近い」と。

当初、芸術家の専門と優位感覚との間に関連性があるのではないかと仮説を立てたが、前述したように、その関連性は見られなかった。これは表現する手段との関連ではなく、むしろ対象、すなわち自身の作品や外的、内的な距離との関連性をみる方が妥当なようである。対象や刺激、作品に対して、視覚的に距離を置いて制作する人もいれば、身体感覚を用いて一体化するように制作する人もいる。それは表現手法による違いではなく、制作スタンスの違いにあると考えられる。そのように考えると、視覚優位と身体感覚優位が、どの専門においても同数であったことは興味深い。

その一方で「意識的創造性」の違いに専門性による違いが見られた。これは、被験者自身がどのようなモチベーションによって創作活動を行っているかを問うたものであるが、音楽家群や画家群では自然や周りからの刺激などを受けていると感じている「外発型」が半数みられたが、身体表現群では全員が自身の内側からの衝動や欲求、使命感といったものと感じる「内発型」であった。自身の身体そのものを表現媒介としている身体表現群が、その表現の発露を自身の内側に捉えているということは妥当な結果であるともいえる。

創造的退行をもって創作活動を行うとき、芸術家は自身の赤裸々な想いを作品として世に晒すこととなる。これは自我の浸透性によって自身の内面を見つめ表現するという積極的な行為であるといえる。また、作品の発表後になると、自身からその作品を引き離し客観的に捉えており、これは自我の防壁的な自我の強さにあるといえる。片口（1982）は芸術家を「不安や葛藤を持たない、冷静で安定した現実の観察者」と表現した。この浸透的でありながらも、作品として昇華することで、楽観的で冷静に引き離せる自我防衛の高さこそが、創造的退行と病的退行の違い、すなわち芸術家群と精神病群との違いといえるのではないか。

しかしまた、この自我のありようも固定的なものではなく流動的である。本研究でも自我の防壁性（Ｂスコア）が０の被験者が２名いた。これが即座に精神病予備軍を示す指標とはいえないが、創造的退行と病的退行の特性は非常に親和性の高いことが本研究でも多くの点から示された。個人が有する自我境界の防壁性と浸透性および現実感覚のありようが創造的退行と密接に関わっており、病的退行の特性を比べるのに有効な指標となった。極論的に述べると、創造的退行とは病的退行の特性を極端にしたものともいえる。自我境界が病的退行以上に浸透的であるが、防壁性がその分高く、現実感覚は病

的退行以上に崩れ、より概念的である。しかし、作品として「昇華」する積極的で楽観的な自我の強さを備えているため、その柔軟で弾力のある自我機能の働きによって一時的な退行に留めることが可能となる。しかしまた、この自我機能が流動的であるため、創造的退行と病的退行は、分断された別の自我機能を意味するものではなく、スペクトラムのようなありようを呈していることも本研究の結果からいえるのではないか。このことに関しては今後、研究を深めていく必要がある。

9．質的検討

本研究では被験者に対して Ror. 法に加えて、D.G.R、叙述語テスト、創造性におけるアンケートによる半構造化面接を行った。調査時間は概ね２時間で、最長４時間に及ぶこともあった。ここからは、各検査から得られたことについて事例を挙げながら、Rappaport の「逸脱言語表現」と Weiner の「作話的反応」に着目して質的な検討を加える。

9．1　ロールシャッハ・テストにおける作話的反応

Ror. 法はあいまいな刺激（ブロット）を提示し、「何に見えるか」を被験者に問うものである。Rorschach は、「無作為的な絵柄の解釈はむしろ知覚と統覚の概念に属する」ことを強調し、空想力や想像力（何をみたか）ではなく、知覚や統覚（いかにみたか）の機能をみるものであるとしている。被験者は 10 枚のブロットという決められた刺激に対して反応を産出する過程には、言語化されたり、言語化されない中にも様々な内的体験をしていることが考えられる。例えば同じ「コウモリ」という反応であっても、それをどこに見たか（反応領域）、何によってそう見えたか（反応決定因）というだけでなく、「コウモリの切ない後ろ姿」や「コウモリに見える。陰鬱な感じ、怖くなってきた…」など、コウモリをより具体的に描写したり、コウモリから派生して物語を作りあげていくようなものなど、さまざまな反応が見られる。このような反応は Kloper 法などではスコアリングに反映させることはできないが、これらは、Weiner の提唱した「作話的反応」に含まれる。Weiner は「作話的反応」を、統合失調症における思考過程の障害のうちの、「理由づけの障害」にあたる反応としており、①名詞、動詞および形容詞による作話的反応　②拡大された作話的反応　③自己への関連づけ、から成る。またこのような被験者のなかで生じている心の動きを詳細にとらえ、スコアリングするシステムとして名大法では「感情カテゴリー」や「思考・言語カテゴリー」を開発している（森田ら, 2010）。

そこで、本研究では、被験者の独創的な言語反応が創造的退行において質的に重要な要素であると考え、これらの要素をふまえて「Thinking Process（T.P）」という反応内容カテゴリーを作ることとした。これは、Kloper 法ではカテゴリー化されない反応を分類した点で他の分類方法とは異なる。すなわち、先述例であげた「コウモリの切ない後ろ姿」は、本研究の場合、反応内容は A（動物）が優先的に分類される。それゆえ、漠然とブロットに対して感情を表現したり、よりブロットから離れて被験者が自由に反応した内容が分類されることになる。そこであらためて、本研究の T.P と反応総数（R）に対する T.P% を表 11 に示す。３群間で分散分析すると F（2,24）=3.03,p=0.67 の有意傾向となる。出現数を見ると、まったくない（0）は、音楽家群で１名、画家群で４名、身体表現群では１名であった。これは反応数とはあまり比例しておらず、反応数が 128 であった被験者は、T.P が１であり、T.P% は 0.78% であった。すなわち、ブロットに対して「コウモリ」のように具体的な何かをみている場合は、それぞれの反応内容に分類されるため、作話的反応がみられても T.P にはカテゴリーされないことも関係していると思われる。

身体表現群が多く、音楽群に続いて画家群が少なくなるという傾向は身体像得点のＰスコア（浸透性）や意識的創造性の「内発型」の割合

においても同様にみられた。

表 11　Thinking Process（T.P）と T.P% の回答数および３群毎の記述統計量（平均、SD、Median、Lange）

NO	Music		Paint		Body	
	T.P	T.P %	T.P	T.P %	T.P	T.P %
1	1	4.76	1	2.94	6	15.79
2	3	4.92	2	10	10	10.10
3	15	31.25	1	5.56	8	16.33
4	0	0	0	0	0	0
5	1	2.70	0	0	1	4.76
6	2	6.06	0	0	15	39.47
7	2	6.06	1	6.25	2	5.41
8			1	0.78	4	12.12
9			2	2.53	1	7.14
10			0	0	4	10.81
Mean	3.43	7.96	0.80	2.81	5.10	12.19
SD	4.81	9.71	0.75	3.27	4.50	10.28
Median	2	4.92	1	1.7	4.0	10.5
Lange	(0-15)		(0-2)		(0-15)	

９．２　叙述語テストにおける創造的退行反応

知覚や統覚（いかにみたか）の機能をみる Ror. 法に対して「叙述語テスト」は空想力や想像力（何をどのようにみたか）を問うものであり、「森の中にいる場面」、あるいは「ある夏の日に、海辺を歩いている場面」を想像してくださいと教示し、被験者が自分でイメージの世界を膨らませていくものである。教示される状況は共通であるが、それ以外は被験者が自ら自由にその内的世界を想像させていくという点で Jung の能動的想像法に通じる面がある。その受け止め方と言語的表現、すなわち叙述語から被験者のもつ優位感覚を算出するテストであるが、その思考的体験過程においても本研究の被験者である芸術家、すなわち創造的退行の優位者群は独創的な反応内容を示した。ここにも本研究で注目した「自我の浸透性（Ｐスコア）」や、Weiner が提唱した「作話的反応」にカテゴライズされる独創的な体験内容が表現された。例えば、想像主である被験者がその森や海のどこにいるかという視点を挙げる。ある被験者の事例をみると、「木:周りを見れば木ばかり」「葉:上を見上げれば葉っぱ」「空：葉っぱの間から見えるうすい水色」「土：下を向けば自分の足と土」「小屋：たぶん近くに小屋がある（自分には見えていない）」といった一連の反応がある。この被験者の想像した森の中には、自分がその場にいて視覚的に捉えていて、その状況がリアルな感覚として伝わってくる。また、別の事例では、「雑草：土の茶色い中に雑草がぽつりぽつり」「空:水色のほのぼのとした天気」「山小屋：木こりとか住んでそうな木の家」と書いた後、「ここまではアニメ的な二次元のイラスト調の森で、ここからはリアリティのある森の中」とイメージが切り替わったことを告げ、「こもれ日：上をみている所からスタート」「手：手をかざして私が見てる」「大きな木：こういう葉の小さいのがたくさんついた背が高く枝もそこそこ分れてる木」と続いていた。この被験者の場合は、想像したイメージが「絵でも描ける」というほどはっきりと見えており、リアリティのある森の中では、自分が上を見上げているところから始まっている。両被験者とも、自分という視点をもち、さながら物語のように記述が進んでいく。このような傾向は他の被験者にも多くみられた。

松田（2003）の大学生らを対象とした研究の記述例ではこのような記述はあまり見られず、「緑：とても緑が濃い」や「家族：4 人家族で母が砂浜にいて、父と子が泳いでいる光景」など、反応は端的であったり、内容が詳細に書かれていても自分はその光景の外にいるといった内容が見られた。一連の物語になっていたり、自分の存在や視点が明確になっているような内容はみられないようであった。

これらの内容は、前述した作話的反応の「自己への関連付け」であり、「自我の透過性」の作用とも捉えられる。

「叙述語テスト」では叙述語による優位感覚を測るテストではあるが、こうした能動的な想像性においても創造的退行の特性が示唆されている。

最後に、Rorschachが重要視していたM反応（人間運動反応）との関連をみてみたい。Rorschachは、「M反応の多い人は、現実的に行動することなく、想像生活に引きこもろうとする人であり、知的で創造力が豊かな被験者ほど、Mの数が多くなる」（高橋, 1981）としていて、Klopferも空想力と創造力の指標として捉えていた。しかし、芸術家が必ずしも多くのM反応を示さないという研究結果はこれまでに報告されており、本研究の被験者のM反応数も正常成人の平均に比べ、低い傾向を示した。このことから考察すると、M反応が捉えるものとは、被験者が環境因などによって培われた性格（character）や社会的役割、知的なものによって後天的に培われたパーソナリティ（personality）を示すものであり、一方、D.G.Rによって見られた芸術家群の創造的退行のしやすさは自我機能の働きを意味している。そのため、 M反応と創造的退行との関連性は見られないのではないかと考えられる。このことは、「1．創造的退行」で述べた、「精神病者の自発的な芸術的創作が病前人格と関連がない」というKrisの研究報告に通じるものである。すなわち、創作活動は性格やパーソナリティとは関係せず、むしろ先天的に備わった気質的な自我機能の働きによるものといえるのではないか。このことはまた、Powerら（2015）が研究した遺伝子面での研究結果にも通じるものがある。すなわち、「創造的退行」と「病的退行」は性格やパーソナリティあるいは「いだく世界」といった観点ではなく、“退行しやすさ”という自我機能における気質（temperament）上の特性であることが示唆される。

本研究では、デジタル・グラフィック・ロールシャッハによって得られた描画について質的研究（事例研究）も行ったが、紀要の性質上、掲載は割愛する。

10. おわりに

芸術家を対象とした研究から創造的退行のありようについて検討してきた。特に、病的退行（精神病群）と創造的退行（芸術家）の差異や境界に着目した。その結果、Weinerが精神病の指標としていた「あいまいな自我境界」「現実との関係」さらに「思考障害」に関して、芸術家群は精神病群と類似する特性を示し、むしろ精神病群を上まわるようなRor.法のスコアを示すことが特徴として見られた。

本研究で明らかになった創造的退行とは、芸術家群に高い割合を示した身体感覚優位の「楽観的な積極性」にあり、自ら「現実との関係」を引き離し、自分の想像世界（概念優位）に没頭するが、現実に戻ることができる「自我の弾力性」という自我機能のありようのうちにある。これは、従来の研究でいわれてきたことを本研究で集約して実証する結果となった。この特性が特に顕著に見られたのは、身体表現を専門とする被験者であった。身体表現群は自らの“身体”を表現媒介とし、他者の“身体”と接触しながら複数人と一緒に創作活動を行うことが多いため、本研究の結果でも浸透性の高い自我境界（Pスコア）が他の2群に比べて特徴的であった。一方、画家群ではこの自我境界のありようが異なり、自我境界が防壁的（Bスコア）な傾向がみられた。これに関しては、画家の創作活動は基本的に“絵と自分”という自閉的な関係にあり、創作面における排他的な構造が反映していることが考えられる。音楽家ではこの関係が同等（P=B）の傾向にあり、音楽のもつ特性が見られているようで興味深い。このように、創造的退行の自我境界のありようが表現手法によって異なる傾向が見られたことは本研究の成果といえる。これらのことから表現行為において身体を用いることは自我境界の浸透的な行為であり、絵画は自我境界を防壁的すなわち自我境界の明確さを保つものであり、音楽はその両価的な行為であるともいえる。

臨床場面において創造的退行を促す表現行為を用いることは自我の健康面への働きかけであ

り、自己治癒力を促進させるとして治療効果が認められている。しかし、闇雲に導入することは侵入的になり過ぎることがあるため、導入にあたっては方法とタイミングを見極めることが重要とされている。その際において、本研究で明らかになった、自我機能の状態と表現手法の組み合わせがひとつの指標となりうるのではないかと考えられる。

また、表現行為というと非言語的な行為のようにも捉えられるが、「言葉はイメージを運ぶ荷車である」（神田橋 ,1998）と言われるように、言語による心理面接を行う場合においても、クライエントとの間で生じることはすべて表現行為である。クライエントがどういった自我機能の状態にある人なのかという視点をもつことは、臨床の幅を広げることにもなる。このことは、クライエントの自我機能の状態によって退行促進的なアプローチが治療的であるのか、あるいは退行抑制的なアプローチが治療的であるのかといった示唆を与えてくれるものとなる。

謝辞

本論文の執筆にあたり主査であり、指導教官として熱意あるご指導を賜りました角藤比呂志教授に深く感謝致します。論文のみならず、臨床家としてあるべき姿勢、幅広い視野と知識、そして実践力を身につけることの大切さをご指導いただきました。今後の臨床家としての「核」をご伝授いただきました。

副査である福田周教授にも大変お世話になりました。また副査であり、臨床場面での貴重な学びの機会をいただきました山田和夫教授と山田和恵先生（横浜尾上町クリニック）にも御礼を申し上げます。西洋子教授 伊藤俊樹准教授、本学臨床領域の先生方、事務や図書館の方々など多くの方の支えやご助言によって本論を書き上げることができました。

ご多忙の中、調査にご賛同・ご協力いただきました 27 名の被験者の皆様に心より御礼を申し上げます。

さらに横浜市立大学 松井道昭名誉教授には本紀要の執筆にあたり多大なるご尽力を頂戴しました。先生に頂いた学びは私の生涯の財産です。

最後に、苦楽をともに励ましあいながら学んできた学友と、影ながら支えてくれた家族、そして最愛なる娘の環に感謝します。

注

1 Freud は自我とエスとの相互作用について、“夢の働き”と“芸術の働き”を比較することで研究を深めていった。芸術家における「抑圧の柔軟性」という仮説をたて、この柔軟性の特性はエス衝動が自我に侵入する仕方に関わるものであるとした。したがって、芸術家を構成している要素がどの程度病理的な傾向をもつのかという問題となる。「心的能力を著しく高めるものはそれ自体、危険な素質から由来する」（Freud, 1905）。

2 精神分析では「特に初期の段階では、（外界との）関連を失っていく感覚に動かされて、以前には得られなかったような力強いイメージが湧くので、感動的な壮大な表現がでてくる」（Kris）と述べている。

3 McNiff（1981）は「心理療法に芸術を用いることが、あらゆる文化と時代を超えて行われてきた癒しの実践を維持し回復するものである」と述べ、表現を用いることが、治療者とクライエントが話し合うための焦点を提供し、また治療者とクライエントが直接関わるのが困難な場合には、芸術作品が両者をつなぐ橋になることを指摘し、「第三の対象もしくは移行対象」として、それを通して一緒にいられるような安全な緩衝地帯となると述べている。

4 Fisher と Cleveland（1958）は、リューマチ性関節炎患者の Ror. 反応の中で、事物の境界や周囲の性質が異常に言及されることに気づき、反応内容の境界質に関する一連の実験的研究を行い、Ror. 法の反応内容の境界に自己の身体表面についてもっている態度が投影されることを見出した。

5 Bandler と Grinder によって創案された NLP は「神経言語」すなわち五感（表象システム）であったり、その五感を通して知覚した現実に関する情報（NLP の述語では「地図」）のプログラミングを、よりよい方向に修正していくという手法である。

引用文献

Fisher, S. & Cleveland,S.E. (1958) *Body image and personality*. Prineton. Van Nostrand.

Frued, A (1936) *Das Ich und Abwehrmechanismen*. Fischer Taschen buch. 外林大作（訳）『自我と防衛 第２版』誠信書房

Freud, S（1905）、中岡成文（訳）（2008）『フロイト全集＜８＞』1905 年―機知、岩波書店

Hirt, M., Kurtz, R., & Ross, W.D. (1967) *The relationship between dysmenorrhea and selected personality variables*. Psychosomatics

Holt, R.R (1977) *A method for assessing primary process manifestations and their control in Rorschach responses*. In M. A. Rickers-Ovsiankina (Ed.) : Rorschach psychology. 2nd ed. New York.

伊藤俊樹（1995）「美術専攻大学院生の自我境界のありかたについて」『日本教育心理学会総会発表論文集』266

飯島典子（2010）「芸術家とロールシャッハ」『心理臨床の広場』4, 2 (2) , 38-39

伊藤俊樹（2005）「美術専攻大学院生の自我境界のありようについて」『ロールシャッハ法研究』9, 48-58

＿＿＿＿（2015）『具象芸術家と抽象芸術家の「自我のための退行」の様相の異同について―ロールシャッハ・テストを通じて―』日本ロールシャッハ学会第 19 回大会研究発表

Jung,C.G (1963) *Memories, Dreams, Reflections*. A,Jaffe (Ed). Random House, Inc.NY. 河合隼雄（訳）（1973）『ユング自伝２ ―思い出・夢・思想』みすず書房

神田橋條治（1997）『初心者への手引き』山王出版

河合隼雄（1969）臨床場面におけるロールシャッハ法. 岩崎学術出版社

片口安史（1982）『作家の診断―ロールシャッハ・テストから創作心理の秘密をさぐる』新曜社

木場清子・木場深志（1980）「ロールシャッハ身体像得点についての基礎的研究（第１報）」『ロールシャッハ研究』22, 33-51

木場清子（1993）「精神分裂病患者の自我境界としての身体像境界 ―ロールシャッハ・テストによる精神病理学的検討」『金沢大学十全医学会雑誌』102, 976-987.

Klopfer, B. & Davidson, H. H. (1962) *The Rorschach technique an introductory manual*. 河合隼（訳）（1964）『ロールシャッハ・テクニック入門』ダイヤモンド社

小出れい子・馬場禮子（1978）「身体像境界得点に関する研究―決定因との相関をめぐって」『ロールシャッハ研究』20, 25-39

Kris, E. (1952) *Psychanalytic Exploration in Art*. New York. International Universities Press. 馬場禮子（訳）（1976）『芸術の精神分析的研究』岩崎学術出版社

Landis,B. (1970) *Ego boundaries*. 小出れい子・馬場禮子（訳）（1981）『自我境界』岩崎学術出版社

Levin, K.N. & Grassi,J.R. (1942) *The relation between blot and concept in Graphic Rorschach Responses*. Rorschach Research Exchange. 6, 71-73

Ludwig, A.M. (1995) *The price of greatness*. New York The Guilford Press.

前田貴記・加藤元一郎・村松太郎・鹿島晴雄（2001）「グラフィック・ロールシャッハ・テスト（慶應版）―視知覚の体制化の神経心理学的検査法」『脳と精神の医学』12, 149-155

松田千広（2013）「感覚・知覚の優位性と認知スタイル・ストレスコーピングの関連性について」『東洋英和女学院大学院人間科学研究科　修士論文』

McNiff, S (1981) *The Arts and psychotherapy*. 小野京子（訳）（2010）『芸術と心理療法』誠信書房

野島寛子・足立宏子（1970）「グラフィック・ロールシャッハの研究」『ロールシャッハ研究Ⅶ』81-97

Piotrowski, Z. (1957) *Perceptanalysis*. New York: MacMillan.

Piotrowski, Z.a. (1943) *A note on the Graphic Rorschach and the Scoring Sample*. Rorschach Research Exchange, 7, 182-184

Power, RA. et. (2015) *Polygenic risk scores for schizophrenia and bipolar disorder predict creativity*. Nature neuroscience. 18(7), 953-955.

Rorschach, H. (1921) *Psychodiagnostik : Methodik und Ergebnisse eines wahrneh mungsdiagnostischen* Experiments : Deutenlassen von Zufallsformen. 鈴木睦（訳）（1998）「新完訳精神診断学」『付形態解釈実験の活用』金子書房

Schachtel, E. G. (1966) *Experiential foundations of Rorschach's Test*. New York Basic books. 空井健・上芝功（訳）（1975）『ロールシャッハ・テストの体験的基礎』みすず書房

Spiegelman, M. J & 河合隼雄（1987）*Active imagination*. 町沢静夫･森文彦（訳）（1994）『能動的想像法―内なる魂との対話』創元社

田形修一（1990）「グラフィック・ロールシャッハの類型化に関する一研究―分裂病者を対象として」『ロールシャッハ法研究』32, 101-111.

_____（1986）「グラフィック・ロールシャッハ・テストに関する覚え書」『中京大学文学部紀要』22(1), 124-145

_____（1987）「グラフィック・ロールシャッハ・テストの類型化に関する一研究　―小学生・大学生を対象として」『中京大学文学部紀要』21(2), 201-218

高橋雅春・北村依子（1981）『ロールシャッハ・テスト診断法Ⅰ』サイエンス社

高橋慶治（1997）『NLP―超心理コミュニケーション』第二海援隊

高橋雅春・高橋依子・西尾博行（2009）『ロールシャッハ・テスト形態水準表』金剛出版

Weiner. I. B (1996) *Psychodiagnosis in Schizophrenia*. Wiley Sons, Inc., NY. 秋谷たつ子・松島淑恵（訳）（1972）『精神分裂病の心理学』医学書院

吉川史津（1990）「ロールシャッハ身体像得点に関する一考察」『ロールシャッハ研究』88-99

吉村聡（2000）「一次過程的思考と創造性―ロールシャッハ・テストと言語連想課題における連想の独創性に関する一考察」『ロ - ルシャッハ法研究』4, 1-10.

_____（2004）『ロールシャッハ・テストにおける適応的退行と創造性』風間書房

参考文献

馬場禮子（1979）『心の断面図　芸術家の深層意識』青土社

Bychowaki, G (1952) *Psychotherapy of psychosis*. Grune & Stratton. New York.

Federn, P. (1953) *Ego Psychology and the Psychoses*. London. Maresfild Reprint.

Fisher, S (1963) *A Fuether Appraosal of the body boudary concept*. Journal of Counsulting Psychology. 27(1), 62-74

Hartmann, E. (1989) *Boundaries of Dreams, Boundaries Dreamers.―Thin and Thick Boundaries As A New Personality Measure*. Psychiatric Jounal of the University of Ottawa. 14, 557-560.

橋本やよい（1979）「自我境界の分析―Rorschach boundary score の検討」『心理学研究』50(4), 203-210

平松優美・石井 雄吉（2002）「芸術と病理とについて　ロールシャッハ法からの試論」『神奈川県精神医学会誌』85-86

弘中正美（1995）「表現することと心理的治癒」『千葉大学教育学部研究紀要』I

加藤實（2004）「心理療法における「表現」とその意味に関する研究」『岐阜聖徳学園大学紀要』教育学部編 43, 73-93

木村捨雄（1970）「創造性教育に関する基礎的研究 -2- 創造的態度の構造」『国立教育研究所紀要』72, 1-231

児玉恵美（2013）日本版境界尺度（JBQ）の作成および精神病理・創造性との関連の検討 . 応用障害心理学研究 , 1-11.

倉本祥子（1998）「ロールシャッハ反応と自我境界の関係」『京都大学教育学部紀要』44, 325-333

黒川由紀子（1992）「創造的老人のロールシャッハ・テスト」『老年精神医学雑誌』3, 1133-1143

森田美弥子・髙橋靖恵・髙橋昇・杉村和美・中原睦美（2010）『実践ロールシャッハ法―思考・言語カテゴリーの臨床的適用』ナカニシヤ出版

岡堂哲・矢吹省（1976）『ロールシャッハ・テスト入門　知覚分析的アプローチ』日本文化科学社

大川一郎・渡辺弥生（1990）「ACL による創造的パーソナリティー尺度の作成」『筑波大学心理学研究』12, 159-167

繁桝算男（1993）「日米学生の創造的態度の因子分析による比較研究」『心理学研究』64(3), 181-190

下垣温子（2007）「音楽が well-being に与える影響―創造的退行の視点から」『三重大学大学院教育学研究科　修士論文」

寺本晴樹（2009）「ロールシャッハ法における距離概念と身体感覚との関連性について」『東洋英和女学院大学院人間科学研究科　修士論文』

Zucker,L (1958) *Ego Strycture in Paranoid Schizopherenia. Springfield*. Charles C. Thomas.